

idea

ニュースレター「アイデア」

2022.11

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 職業訓練法人 東磐職業訓練協会 専務理事 村上敬一さん
- 3 | 団体紹介 | 大原スポーツ愛好会
- 5 | 地域紹介 | 弥栄第4民区（一関）
- 7 | 企業紹介 | 農事組合法人 なつかわファーム（花泉）
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴® NPO＝コミュニティビジネス？
- 9 | センターの自由研究 | くらし調査ファイルNo.19「こうせん粉」

今月の表紙

企業紹介に登場する「農事組合法人なつかわファーム」が利用する「JAいわて平泉 夏川地区カントリーエレベーター」の内部。カントリーエレベーターは、米の集荷、乾燥、精選、貯蔵などを行う施設で、運び込まれた米は、保管に最適な水分量に乾かされた後、粳ごと巨大なサイロで貯蔵。様々な機械・設備がベルトコンベヤーやバケットエレベーターで連結しているため、自動的に各工程が行われていきます。

idea

発行 いちのせき市民活動センター
せんまやサテライト

〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736

ホームページ: <https://www.center-i.org/> メール: center-i@tempo.co.jp

おしらせ

募集

一関・平泉 黄金の國バルーンクラブ 会員募集中！

一関・平泉地域を熱気球イベントで盛り上げることを目的に活動する「一関・平泉黄金の國バルーンクラブ」では、一緒に活動する仲間を募集しています。主な活動は、「一関・平泉バルーンフェスティバル」や「熱気球教室」のサポート、「体験搭乗(係留)イベント」の開催などです。熱気球の知識や経験は不問。興味のある方はお気軽にお問合せください。※入会は高校生以上。

年会費:
＜個人＞ 3,000円
＜法人・団体会員＞ 10,000円
問合せ:0191-21-8413
(一関市商工労働部観光物産課内)

情報

ふじさわ朝市2022

今年8月に活動を開始した「ふじさわ朝市の会」が主催する「ふじさわ朝市2022」を10～12月の第1日曜日に開催します。「つなげる、つながる、楽しむ」がテーマの朝市で、生産者こだわりの“おいしいもの”が集結！野菜やりんご、米、豆腐、コーヒー等のほか、雑貨の販売もあります。詳しくは下記までお問合せください。

開催日:10～12月の第1日曜日
(10/2・11/6・12/4)
時間:9時～12時
場所:カンブン藤沢店 第3駐車場
(一関市藤沢町藤沢字早道)
問合せ:0191-63-5588(伊東)

募集

就職氷河期世代支援事業 「いちサポ・ネクストリー」 職場体験就業協力企業募集

就職氷河期世代(1990年代～2000年代に就職活動を行った世代)の就職や転職を応援する支援事業「いちサポ・ネクストリー」では、職場体験就業先(企業)を募集しています。職場体験就業(短期雇用)を実施していただいた企業には、「雇用型職場体験制度」を活用し、就業支援金として1日当たり2,000円～4,000円を支給いたします(最長2週間分)。詳しくは右記QRコードを読み込むか下記までお問合せください。



問合せ:0191-48-4467
(いちのせき若者サポートステーション)

情報

薪ストーブ用 薪の販売

「森林資源を活用する一関市民の会」では、森林資源の循環活用の一環で、薪や燃料チップづくりに取り組んでいます。薪ストーブ用の薪(長さ40cm前後)をコンテナに詰めてご自宅まで配達します。ホームページからも問合せや購入が可能です。

薪の樹種・価格:※軽トラック1台分
＜針葉樹 薪＞ 10,000円
＜広葉樹 薪＞ 15,000円
＜配達料＞ 2,000円
HP: <https://sinnrin.web.fc2.com/index.html> (「森林資源を活用する一関市民の会」で検索しても、上位に表示されます)
問合せ:070-4345-2244
(事務局・千田)

情報

令和4年度 「全国わんこもち大会」 開催見送り

毎年2月に開催している「岩手・一関全国わんこもち大会」は、市内の高校生が実行委員として企画準備及び当日の運営を行っています。令和4年度においては、コロナ禍にて企画準備体制が整わなかったことから、開催を見送ることとなりました。例年多大なるご協力をいただいている企業・団体、関係各所の皆様、参加を検討されている皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

問合せ:0191-48-3735
(いちのせき市民活動センター千厩サテライト内 岩手・一関全国わんこもち大会実行委員会事務局)

情報

「いちのせき市民フェスタ22」 「イチコレ第3回コンテスト」 YouTubeにて公開中

令和4年度の「いちのせき市民フェスタ22(8月28日開催)」参加団体によるPR動画と、「イチコレ第3回コンテスト(9月4日開催)」のランウェイの様子を、当センターのYouTubeアカウントにて公開中！動画はQRコードを読み込むか、YouTubeページの検索フォームで上記イベント名を入力していただくと上位に出てきます。詳しくは下記まで。



▲いちのせき市民フェスタ22 ▲イチコレ第3回コンテスト

問合せ:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。



旧町村別の人口動態等を共有します。

作品名 「牧草ロールのハロウィン」



花泉町花泉宇津村にある(株)KOWAの牧草地。海外から取り寄せたオレンジ色のサイレージフィルムには、表情豊かな顔が描かれ、まるでジャック・オー・ランタン。社長さんの「農業に遊び心を」というモットーから、甥・姪たちと呼びかけて描いてもらったそうです。

2022年10月1日付
(2022年9月30日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	110176	-59
世帯数	46471	39
出生数	41	-3

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54890	13	24579	37
花泉	12204	-9	4706	1
川崎	3293	1	1283	2
千厩	9986	-12	4120	-1
大東	12153	-3	4931	6
東山	5952	-14	2282	0
室根	4464	-23	1776	-6
藤沢	7234	-12	2794	0

166 / 110,176

村上 敬一

職業訓練法人東磐職業訓練協会の専務理事であり、一関市より委託を受けて管理運営を行う「両磐地域職業訓練センター」では「刈払機取扱い作業安全衛生教育」の講師も担う。千厩町千厩在住で、中山間地域等直接支払制度(以下、中山間事業)の協定を結ぶ「千厩町第4区農業集落」の事務局長を長年務めるなど、公私ともに刈払機作業に精通。



「刈払機取扱い作業安全衛生教育」学科の様子
(講師：村上敬一氏)

第100回

東磐職業訓練協会 専務理事 村上敬一さん

いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「安全」に対する「知識」を ～草刈り作業を理論的に見つめ直して～

労働災害を防止するため、労働者の就業にあたって必要な安全衛生に関する知識等を付与するために実施する「安全衛生教育」^{※1}。労働者に対し、事業者が教育機会を与えることを求めるものですが、その中には「刈払機取扱い作業」も含まれます。最も身近な農機具と言える「刈払機」^{※2}における「安全衛生教育」の必要性について、「刈払機取扱い作業安全衛生教育」の講師にお伺いしました。

小野寺 自治会や地域協働体などで高齢者宅などの草刈りを行ったり、草刈りを有償で代行する有志グループを結成する動きが増えてきました。その際に「資格がないとダメなのは」という話題が出てくるのがあります。まずはその答えを教えてください。

村上 「刈払機取扱い作業」に対する「安全衛生教育」を指していると思います。技能講習の資格とは異なりますが、平成12年に国から「安全作業をするために講習を受けることが望ましい」という通達が出たんです。要は法令的な作業資格ではなく、事業者に求められる安全衛生教育の一つという位置づけです。

小野寺 資格ではないんですね。ではどういう人が受講の対象なのでしょう？

村上 基本的には「それでお金を得ている人」「仕事として刈払機を使用する作業に従事する人」が対象です。ここでも年間約150人が受講していますが、その多くは会社からの派遣です。

小野寺 刈払機を仕事で使う人たちが、雇用主から教育機会を与えられるということですね。

村上 そう、労働安全衛生法の中で、事業主は作業従事者に教育を受けさせなければいけないという規定があるんです。なので森林組合や土木業者、建設会社の人たちが来ます。他方で、中山間事業の人たちも来ますよ。

小野寺 僕の地域の人も受けてきたと聞きました。中山間事業も「従事者」にあたるんですか。

村上 確かに日当をもらう地域もありますが、厳密には従事者ではありません。中山間事業での事故が多いことから、市が安全教育の受講を斡旋しているんです。それで、5年前から市と連携し、出張講習もするようになりました。

が多いですからね……。

村上 そう、持ち寄りということとは、人によって管理の仕方が違うということ。機械の点検をしたことのない人も多いです。

小野寺 そういうのって家庭の中で親から子へ教えられていくものだったので、自己流も多いでしょうし、わざわざ講習に行くという感覚がないですよね。

村上 私も以前はそう思っていました。事故事例などを見聞きするにつれ、なんとかしないといけないと思いました。安全作業は見えて覚えるだけでなく、「安全に対する知識」がないと、事故防止ができないんですよ。

小野寺 集落などへの出張対応もしているということですし、自治会行事などで安全講習を盛り込むような機運が必要ですね。

村上 集落の仲間同士で学ぶと、その後に注意し合うなど、教育効果は非常に高いです。自治会の皆さんにも受講していただきたいですね。

小野寺 地域に向いて刈払機の安全講習をしてくれるということですか？

村上 原則15人程度を受講者がいる場合にはありますが、これまでに蔵美地域や大東、藤沢など、35団体で行いましたね。

小野寺 講習はどのような内容ですか？

村上 大きく分けると「安全の確保」と「振動障害防止」という2つの柱があります。エンジン式の刈払機は「振動工具」^{※4}なんです。振動障害を発症する可能性もあるので、その予防に関する知識もお伝えしています。

小野寺 振動障害！あまり意識したことがないですね。

村上 振動障害はチェンソーや土木工事で発症することが多いですが、刈払機も可能性はゼロではないので、国の通達では刈払機の作業時間は最大4時間以内という規定があるんです。

小野寺 一日中草刈りしてる日もあります(笑)4時間じゃ草刈

り終わらないですよ。

村上 農家さんはみんなそう言います(笑)なので、例えば30分連続作業をしたら5分以上の休憩時間を取るとか、そういう指導をしています。あとは防振手袋の着用を促したり。

小野寺 実際、振動障害を発症する人は多いんですか？

村上 振動工具全体で見ると、全国で毎年2百人近く労災認定されているようです。ちなみに、20〜30代に振動工具を頻回に使用した人が、40代になってから発症するケースもあり、1年以上治療している人は全国で5千人くらいいます。ただ、根本的な治療方法が確立されておらず、完治はしないようです。

小野寺 そう聞くと予防の必要性を認識しますね。もう一方の「安全の確保」についてはどのような内容ですか？

村上 例えば「キックバック」^{※5}ですね。キックバックによって他者を傷つけぬよう、5mを危険区域として、その中は他人を

※4 振動が手・腕を通して身体に伝達されることにより生じる、手指等の末梢循環障害、末梢神経障害、運動器(骨、関節系)障害の3つの障害の総称。
※5 作業中に飛散物が飛ばないようにする飛散物防護カバーなどを、作業がしにくいという理由で外してしまう人もいる。

※1 労働安全衛生法の59条〜60条に規定。 / ※2 学科教育5時間、実技教育1時間のカリキュラムが定められている。
※3 事業主が従業員に刈払作業を行わせる場合を指す。

団体紹介

はばたけ子どもたち！そして戻っておいで

大原スポーツ愛好会

「大原ミニバスケットボールスポーツ少年団(以下、大原ミニバス)」に所属していた保護者や卒団生で令和元年に結成。スポーツ活動を通して「自分の好き」を見つけるチャンスや経験の場を提供しながら、健全育成・人材育成活動を行っている。

〒029-0711 一関市大東町大原字一六101-3(河野)
TEL:090-6491-3926(同上)

写真:「大原ミニバス」の児童らと、大原スポーツ愛好会メンバー(一部)



地元で様々な体験や挑戦ができる場を作ろう

「私は福岡県出身で、大東町大原に嫁ぎました。私が生まれ育ったところは、多種多様な習い事や養成所、体験や経験の場が整っていて、地元を離れて初めて『恵まれた環境だった』と気づかされました」と語るのは、「大原スポーツ愛好会」会長で、4人の子を育てる河野麻希子さんです。

「子どもたちは成長とともに挑戦する気持ちが芽生えますが、ここ(大原)にはメディアで見えるような『やってみたいこと』を体験できる場が少ないんです。『子どもの挑戦』や『夢』を後押しするために、家族が自分の時間を削って遠方まで送迎をしたり、そうした活動のある地域に転校する世帯もあるのが現状です」と続けます。

転機となったのは平成29年、河野さんの長男が所属していた「大原ミニバス」が、様々な要因で休団を余儀なくされたことでした。「やってみたい」の場がさらに失

大原スポーツ愛好会

われた現実には、河野さんを含む元大原ミニバスの保護者や卒団生、地域の方など十数名が一念発起!「子どもたちが様々な体験や挑戦ができる場の提供・環境づくりをしよう」と、「大原スポーツ愛好会」を結成したのです。

スポーツを通し、子どもたちの可能性を広げる

令和元年の結成以降、バスケットボールに限らず、リズムトレーニングやダブルダッチ(2本の縄を使って跳ぶ縄跳び)、ダンス、体幹を鍛えるためのランポリンなど、魅力的なスポーツ体験を子どもたちに提供している同会ですが、結成から現在までこだわり続けているのが「自力での交通手段がない大東町(特に大原)の子どもたちが対象」ということ。

「旧一関市の中心地に住む子どもたちは、自分で挑戦することができ環境がそれなりに整っていますが、ここの子どもたちはどこに行くにも送迎が必要。そんな子

なことがある」と常に前向きです。

この取材中にも目の前で生き活きとバスケットボールを追いかける子どもたち。同会や地域の想いが通じ、将来は彼らが、スポーツを通じた地域交流の場を広げていくことでしょう。

- Photo

gallery -

リズムトレーニング

リズムの感度をあげるトレーニングをすることにより、ケガの予防やパフォーマンス向上へつながっています。



バスケットクリニック

海外でのプレイ経験もある指導者から、取り組みの姿勢や技術を学んだことも。身体の使い方も丁寧にしてもらいました。



ダブルダッチにも

自分が夢中になれるものを見つけてほしいという思いから、ダンスやランポリン、ダブルダッチにも挑戦。次はBMX!



自然な地域貢献

冬には他団体とも協力し、練習前に駐車場の雪かきも。子どもたちは楽しいトレーニングだと言って頑張ってくれます。



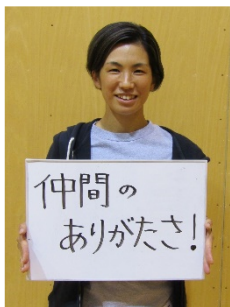
交流の場を広げ、地域を盛り上げる種を蒔く

令和2年、同会や地域と一緒に話合いを重ねた結果、休団していた「大原ミニバス」が活動を再開。ミニバスに関わる保護者と同会メンバーは重複している人も多く、大原ミニバスの活動日が「大原スポーツ愛好会の話し合いの場」にもなっています。

令和2年、同会や地域と一緒に話合いを重ねた結果、休団していた「大原ミニバス」が活動を再開。ミニバスに関わる保護者と同会メンバーは重複している人も多く、大原ミニバスの活動日が「大原スポーツ愛好会の話し合いの場」にもなっています。

Q.スポーツ活動を通して感じることは？

会長



A. 仲間のありがたさ!

この あきこ

河野麻希子さん

大東町に嫁いで15年。「子どもたちの送迎にはご近所さんのお力を借りることも」と、大原の「地域で子育てしよう」という感覚を大切にしています。

事務局



A. 成長

すがわら みなみ

菅原みなみさん

北上市から大原へ。河野さん同様、4人のママ!無理のない協力を心がけており、「スポーツ活動を通じて親も子も成長が実感できている」とのこと。

地域紹介

横並びの各種組織が「補完」し合いながら

俗称は「日向」

富沢村と楊生村が明治8年に合併して誕生した旧弥栄村。富沢村側に位置する弥栄第4民区には、かつては診療所や商店、小・中学校、幼稚園、公民館などが建ち並び、弥栄村の中心地だったと言えます。

令和4年度現在も、同民区内には一関市弥栄市民センター、幼稚園などがありますが、「当時は商店が並び、とても栄えていた。現在は当時の面影があまり残っておらず、今年度には幼稚園も閉園となり、さらに寂しくなる」と、区長の高橋東喜さんは切ない表情を見せます。

東西に広がり、北上川にも隣接しているため、富沢堤防が出来上がるまでは洪水常襲地帯だった同民区ですが、なぜか昔から地名としては存在しない「日向」と呼ばれています。その理由について高橋さんや総務・会計の須藤新一さんは「この民区は山の上(高地)に

弥栄第4民区(弥栄)

行政区は「弥栄4区」。52世帯133人が暮らす。行政区長が民区長として自治機能のトップも担い、総務・会計、班長(5班)、衛生委員、監事などで事業を行う。

左の写真：新年交賀会の様子(令和2年度)



弥栄第4民区

一関

位置し、他の民区よりも日当たりが良かったからではないか」と推測。実際、現在も事業所の農場が立地するなど、農環境に恵まれたエリアです。

民区内の各種組織が協力しあっている

同民区内には様々な組織が横並びで存在し、「弥栄第4民区」としての事業(春・秋の一斉清掃や地区内環境保全活動、新年交賀会など)以外にも、同民区住民が広く参加協力する活動があります。

毎年1月に行われる「日向どんと祭」は、「日向どんと祭実行委員会」を中心に開催され(コロナ禍で2年中止)、民区としては賛助金という形で支援します。民区内の子どもが神の使いとなってお焚き上げの点火という大役を担います。

また、民区内にある金昌寺で行われる「節分豆まき会」もその一つです。「せつかく地元にあるお寺なので何か活用ができないか」と当時の「金昌寺読経会」が中心

- Photo

gallery -

豆まき会の主役!?

赤鬼・青鬼の人形は住民が手作りしたもの。鬼たちが着用している服は、各家庭で着れなくなったものを着せています。



世代を越えた交流の場

今年度の花壇整備には、子供会と民区住民の15名ほどが参加。子どもたちも大人に負けじと一生懸命作業に取り組みました。



当祝者に記念品贈呈

毎年、弥栄地区福祉活動推進協議会と一緒に取り組む敬老事業。今年度は、民区内の27名に記念品が贈られました。



「日向サロン」

サロン実施時には、「日向お茶会(みまの唄)」を熱唱していましたが、コロナ禍で歌は休止中。また歌える日が楽しみです。



人口減少など、変化には柔軟に対応

須藤さんは、「民区としての行事は少ないかもしれないが、各々の活動はあって、そこには子どもも絡んでくる。自分の子どもがそこで経験して、『こんな行事そういえばあったな』って思い出してくれたり、その経験が子から孫へとつながれば、なお嬉しいね」と笑顔で語ります。

同民区内には「日向子供会」があり、多いときは20人以上の子どもが子供会の構成員でした。夏は海水浴、民区内のお寺で合宿、冬は風揚げなど、数多くの行事がありました。時代とともに民区内の子どもが減少。小学生を対

象としていた子供会も、現在では中学生まで対象年齢を広げ、3世帯4人が構成員となっています。

そんな子供会が40年以上続けている活動が「かわさき夏まつり花火大会」の翌日に行うゴミ拾いです。今年で50回を迎えた花火大会ですが、当初は簡易トイレも設置されておらず、堤防の上ではバーベキューを楽しむ人などで多くのゴミが散乱していたと言います。

「捨てられたゴミは風に飛ばされ、いずれは川に落ちて環境汚染の要因になりかねない。自分たちの地域を景観の良いものにしようと始めた」と振り返り、「今では民区住民の有志も参加し、一緒に活動している。また、運営側の対策等で年々捨てられるゴミは減っていますが、今後もこの活動は継続していきたい」と続けます。

花壇整備も同様に子供会が長年取り組んできましたが、子供会構成員の減少を鑑み、3年前からは民区行事にも取り入れられました。花苗の植え付け、草取り、後片付けの各種作業を、班毎に割り当てし、子供会と一緒に取り組みます。

「子どもが減少し、子どもたちと交流する機会が少なくなっている中でコロナ禍に。地域の子どもたちとの交流がさらに制限されてしまったが、この

Q.集落の自慢は何ですか？

区長

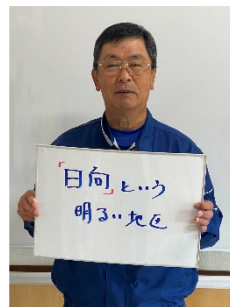


A. 協力

たかはし とうき
高橋東喜さん

5期10年目。区長の前は会計を2期務め、民区運営に長年携わるほか、弥栄地域の地域協働体「弥栄地区まちづくり協議会」の会長も務めています。

総務・会計



A. 「日向」という明るい地区

すとう しんいち
須藤新一さん

5期10年目。各戸1人は委員となっている「日常管理委員会」の委員長も務め、区長と一緒に民区運営を支えています。

花壇整備は子どもと交流できる貴重な機会につながっている」と、高橋さん。「横並び」で維持してきた地域のバランスポイントを大切にしながら、子供会をはじめ、各種組織の在り方を少しずつ検討し、時代に適応させていきます。

平成26年9月15日設立。「油島地区営農組合(平成16年発足)」「涌津地区営農組合(平成17年発足)」「永井地区営農組合(平成19年発足)」が一本化し、圃場整備後の「担い手(農業経営の主体)」として、農地利用を集積。その集積面積は468haにも及び、県下一位を誇る(令和4年現在)。

水稻品種「ひとめぼれ」「金色の風」等を生産し、主力の「ひとめぼれ」はJAを通じ、福岡県の「エフコープ(生活協同組合)」に全量出荷。そのほか、畜産農家(構成員)用のホールクロップサイレージ用稲や、とうもろこし、ズッキーニ、寒じめ白菜などの野菜栽培(転作圃場)にも取り組む。

「経営」 < 「地域」のバランスを取りながら

岩手県(一関市花泉町)と宮城県(登米市)の県境を流れる河川「夏川」。その沿岸の「夏川沿岸土地改良区」エリアに農地を所有する住民455人が構成員となり、当該地域農業の「担い手(経営主体)」と位置付けられているのが「農事組合法人 なつかわファーム」です。

奥州藤原氏の荘園である「高倉荘園」にも含まれ、水稻栽培の環境には恵まれたエリアですが、土水路の維持管理や、大型化が進む機械に対して狭小な農道など、改善が望まれる課題が散見されるなか、念願の圃場整備事業に手上げし(同改良区内97%以上の同意を獲得)、採択されたのは平成14年度でした。

油島・涌津・永井と、3地区にまたがるため、それぞれに圃場整備に紐づく営農組合が発足。整備中の平成25年からは、農業を取り巻く情勢を鑑み、3つの営農組合を統合した農事組合法人設立を目指し、説明会を重ねました。

平成26年9月、421人の組合員(現在は455人)で法人を設立。平成28年度には受益面積525haにも及ぶ圃場整備が完了し、うち46

圃場整備後進地から 岩手県一の集積圃場へ

8haが同法人に集積されました。なお、農地利用集積を進めるため、法人設立と併せて「農地中間管理事業」も導入しており、圃場整備事業を経て、令和3年度末の農地利用集積率は92.56%となっています。

※1 「所有」「借入」「農作業受委託」により、農地の利用を集約化すること。
※2 農地中間管理機構(岩手県の場合、公益社団法人岩手県農業公社が、農地の借受け・貸付け、管理、基盤整備等による利用条件の改善を行う仕組み)。

孫子(まご)に残すのは 明るい地域営農の仕組み

圃場整備にあたり、推進側(土地改良区)役員が目指したのが「孫子に負担を背負わせない」こと。農地所有者に1割程度は負担金が発生することが一般的ですが、様々な工夫と英断を重ねることで「負担金ゼロ」を達成しました。

同法人の場合、農地の出し手、受け手の双方が構成員であり、その数は他農事組合法人と比べ飛びぬけて多いため、法人としての意思統一、

合意形成は容易ではありません。

その一つが「受託者」の考え方。組合員の多くは離農していますが、それでも受託者は116人(発足時は約130人)。「経営」のことだけを考えれば、半数以下の人数を「雇用」した方が人件費は抑えられますが、「それでは地域のつながりに波風が立つ」と、代表理事(組合長)の及川雄一さん。「農業機械を所有している人、身体が動く限り農業を続けたいという人の想いも尊重しながら、『経営と地域』という関係性を考えていかなければ」と続けます。

令和3年度に「中長期ビジョン」を策定し、今後10年のロードマップを描いた同法人。構成員との意思統一を進めながら、目下の目標は若い世代を専従職員として雇用する体制の整備です。その上で、スマート農業の導入や「なつかわブランド」の確立など、地域農業の担い手として、挑戦を続けます。



- 1 今年度新調したヤンマーの6条刈コンバイン(YH6115)。
- 2 平成28年度完成の「JAいわて平泉 夏川地区カントリーエレベーター」。
- 3 倉庫には各種農業機械がズラリ！

DATA

〒029-3206
一関市花泉町永井字神明93
(夏川沿岸土地改良区建物内)
TEL & FAX 0191-36-2171

地域運営の落とし穴②
NPO
＝コミュニティビジネス？

博識杜の フクロウ博士

第44話

※ここで言う「NPO」は、広く市民活動団体全般を指し、「NPO法人」のことだけを指しているわけではありません。

高めるべきは「心意気」と「専門性」

NPOという存在が時間の経過とともに「社会の担い手の一人」とされるようになりました。一方で、「コミュニティビジネス」や「ソーシャルビジネス」という横文字と同系列に並べられ、「NPO＝コミュニティビジネス」というイメージも。間違いではないと思いますが、個人的には違和感があるのです。

「コミュニティビジネス」とは、課題解決の手法にビジネスの視点を持ち、課題解決と同時にコミュニティの再生や新しい雇用の創出、地域経済の活性化を狙うものです。地方の企業が掲げる企業理念は、「地域のために〇〇」「地域の〇〇を課題として」というものが多く、コミュニティビジネスに通じるものがあります。全国展開する大手の企業もCSR活動(企業の社会貢献活動)に取り組んでいますし、さらに今はSDGsの観点から、持続可能な社会のために地域の課題解決に積極的になり、コミュニティ(地域課題)やソーシャル(社会問題)の分野でも活躍が目立ちます。つまり、何もNPOだけがコミュニティビジネスを担う存在ではないのです。

むしろ、もともと経営経験があったり、起業志望の人であればまだしも、ビジネスに不慣れなNPOや市民組織が「コミュニティビジネス」と謳っても、ビジネススキルが伴っていなければ成立しません。NPOをたちあげる＝ビジネスに絡めるのではなく、まずはボランティアな活動から取り組んでいき、そこからビジネスとしての芽が出る要素があればコミュニティビジネスに発展させれば良いのであって、無理をする必要はないと思っています。



最近のNPOは、補助金や助成金ありきになっていて、市民公益の気持ちから遠ざかっているように感じる。社会課題に対する新たなプレーヤーの誕生に期待する気持ちの表れなのか、従来の事業支援の助成金だけでなく、設立支援の助成金も増えてきています。しかし、設立後に自立できるか未知数の部分も多く……。

収支を生まなくても動かさなければいけない「公共事業」同様、NPOも収支ではなく、「課題」があるから活動します。もちろん何をするにも資金は必要ですが、心意気(=覚悟)が必要ではないかと思うのです。持ち寄りの会費を原資に、身の丈に合った活動からスタートし、経験を積み重ねながら事業の必要性に重みをもたせていく。そんな心意気を持った「コテコテのNPO」は、ボランティア要素が強く、美德を優先します。コロナ禍で食糧支援を必要とする人たちのために身銭を切って食糧を集め、自分の生活が苦しくなったりすることもあります。市民セクターの動きは、非常に面白い。熱い思いをもった市民らしくていいじゃないですか。とは言え、組織としての活動なので、運営のルールやコンプライアンスの順守(≒マネジメント)は絶対!という部分はあります。

収支を生むか生まないかで判断するなら、今はNPO法人のほかにも様々な法人格があるので、そちら(一般社団法人等)を選択した方がいいでしょう。起業しやすさの理由でNPO法人を選択する時代ではなくなりました。

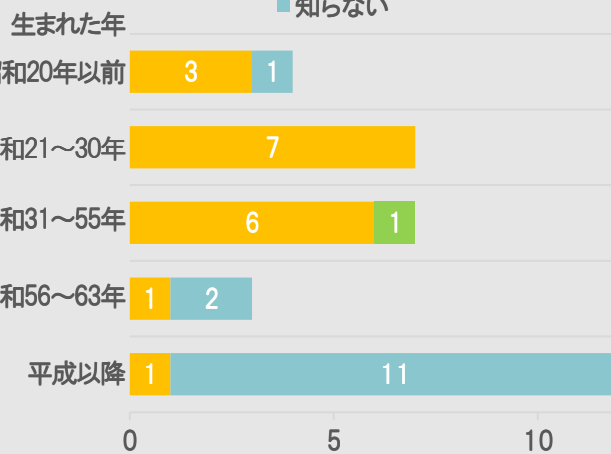
NPOは、地域や社会の課題をキャッチし、その課題に対して専門的なノウハウやスキルを持っていることが強みであり、事業規模の大小を問うものではありません。むしろ事業規模が小さくても、企業などとタイアップや連携を図りながら課題解決していくことが、双方の強みを生かすことになるので、効率的と考えます。ちょっと前の時代は、様々な部署(部門)を抱えた「自己完結型」の企業も多くありましたが、今は、自己完結型よりも「事業連携」をする「パートナーシップ型」が増えてきているように感じます。それぞれが専門領域を高め、連携することにより成果を最大限に引き出していく「協働型の社会」です。NPOも事業規模ではなく、「専門性」を高め、協働型社会の一員として頑張っていきましょう。

こうせん粉を 食べてもらった

世代によってはその存在すら知られていない「こうせん粉」。果たして当地域では現在のどの世代を中心に食べられていたものなのか、また、どのような食べ方をしていたのか、実食も交えた調査を行いました！（当センター主催イベント「いちのせき市民フェスタ22」の中に調査ブースを設置し、参加団体や会場に訪れた一般来場者合計33人にご協力をいただきました）

「こうせん粉」を知っていますか？

- 知っていて食べた事がある
- 知っているが食べた事はない
- 知らない



◀実際の調査の様子。ベトナム出身の若者たちからは「ベトナムにも同じような食べ物があり、朝食に飲む」という情報をいただきました。なお、今回初めて「こうせん粉」を食べた人からは「美味しかったが、好んでは食べない（砂糖入りでも）」という声が多い中、砂糖なし版を「日常的にも食べたい」と答えた平成以降生まれも存在していました！

「こうせん粉」を知っているかどうかを尋ねた結果が左グラフです。昭和55年(今年42歳)以前生まれの方の多くは存在を知っており、かつ食べた経験もあるようです。一方、平成以降生まれだとほぼ認知されておらず。唯一「知っていて食べた事がある」と回答した方は、今でも家族がたまに食べているとのことでした。

どんな食べ方をしていましたか？(複数回答可)

- そのまま
- お湯で溶いて(何も加えず)
- 砂糖を加えて、お湯で溶く
- ご飯に混ぜて

次に、食べた経験のある方(18人)に、食べ方について尋ねた結果が右の円グラフです(複数回答可)にした結果、回答数は20。最も多いのが「砂糖を加えてお湯で溶く」という食べ方で、どの年代でもこの回答が。なお、「そのまま」を選択した4人は昭和30年以前生まれの方々でした。

また、「どんな時に食べていたか」という問いに対しては、8割近くが「日常のおやつ」でしたが、日常的にはなく、「病気や妊娠中などの栄養補給」として食べていたという方もいました。

本調査には一関市赤荻にある「(有)松勘商店」さんの「こうせん粉」を使用。同商品は約70年前に販売を開始し、製造方法等のリニューアルを重ねてきました。現在は県内産の大麦を使用していますが、販売当初は地元産大麦を使用。健康志向の高まりから、近年は販売数が右肩上がり、銀座にある本県アンテナショップでも販売中！



地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査！

ミッション
72

暮らし調査
ファイルNo.19 「こうせん粉」

センターの
自由研究

前号で「たばこどき」について調査する過程で、中高年世代に向けて「幼少期のおやつ」に関するヒアリングも行いました。その中で聞かれたのが「こうせん粉」という回答。中高年世代にとっては「なつかしい」ものである一方、平成生まれ世代では見聞きしたことのないという人も多い「こうせん粉」。当地域において「こうせん粉」はどれほど馴染みがあり、いつ(まで)・誰が・どのようにして食べていたのか、調査してみました。

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■ 身近な存在だった大麦とこうせん粉
「こうせん(粉)」は焙煎した大麦を挽いて粉にしたもので、地域によっては「はったい粉」や「麦こがし」と呼びます。落雁など、和菓子の材料としても使われますが、当地域では「そのまま食べた」「お湯で溶かして食べた」など、こうせん粉そのものをおやつのような位置づけで食べたようです。

その歴史は古く、日本には小麦よりも早く伝わり、奈良時代には日本各地で栽培されていたとか。現在では輸入が主となっている大麦ですが、当地域でも昭和30年頃まで盛んに栽培されており、旧花泉の数値を見ると、昭和35年頃までは5割近い家庭で大麦を栽培していました(花泉の場合小麦の方が多く、小麦は7割強)。旧千厩町の数値では、昭和50年でも5割強の家で麦(大麦・小麦の割合不明)を栽培していたことに。ちなみに、令和2年の農林業センサスによると、当地域で現在販売を目的として大麦を栽培しているのはわずか2経営体のみです(自家用は把握不可)。

現代のようにお米の収穫量(非作付面積)が多くはなかった時代、大麦はお米の代用食として貴重な存在でした。大麦と小麦とは、タンパク質の成分が異なっており、小麦が伸展性・膨張性に優れる「グルテン」なのに対し、大麦は吸水性に優れる「ホルデイン」。この特徴を活かし、「はっと(すいとん)」や「うどん」には小麦を用い、「かて飯」として、お米と一緒に麦を炊く「麦こはん」には大麦が用いられました。ただし、当時の大麦は外皮が剥けにくく、火が通りにくかったり、取り除けなかった外皮がゴワゴワして美味しくなかったという声も。「こうせん粉」は、大麦の食べにくさをカバーし、長期保存も可能とする、生活の知恵なのかもしれません。

畑を有効活用！間作栽培の知恵

「麦畑」と聞くと、広大な土地で黄金の穂が揺れている光景をイメージしてしまいがちですが、当地域における昭和30年代頃までの麦栽培は「間作栽培」が基本でした。全国で見れば、水稻と大麦の二毛作(同じ圃場にて、冬～初夏にかけて大麦、初夏～秋にかけて水稻)をしている地域が多いようですが、当地域では大麦と葉たばこ、もしくは大麦と豆類の「間作」が主流！

「間作」とは、ある農作物の畝と畝の株の間に他の作物を植えて栽培することで、「限られた畑の土地を有効に活用する」という考え方によるものです。加えて、麦を刈り取った後の根元を残したまま、葉たばこなどに「土寄せ」することで、株のふらつきを押さえるだけでなく、保温効果や追肥的な効果も期待できたのだとか。さらに、葉たばこにおいては、「タバコモザイク病」という「タバコモザイクウイルス」による感染症を防除する効果も。ただし、間作では収量に限界が出てくるため、当地域で葉たばこ栽培がピークとなった昭和30～40年代には、葉たばこ栽培を優先し、麦類との間作は減っていきました。



▲小麦・大麦ともに、畝を立てて栽培(左写真は東町摺沢地域で小麦栽培を行う農家さんの畑。当時は麦畝の間(色付けした部分)で葉たばこ等を栽培し、麦の刈り取り後は残った株ごと土寄せを行いました(右イラスト参照)。

「生きるために必要な食糧を得る」ために、間作などの工夫をしながら麦を栽培してきましたが、水稻の栽培環境も整い、さらに「商品経済」が発達したことで、農家においても「換金作物」の方が重要になっていき、それまで暮らしを支えてくれていた麦は急激に姿を消していきました。地域差はありますが、ヒアリングや文献資料から推測するに、概ね昭和35年頃が転換期だったようです。

▼当地域における間作栽培のスケジュール。麦は秋に種を蒔き、5枚の葉がいたら1回目の「麦踏み」をし、「分けつ」させます。2～4回目は霜柱で根が持ち上げられるのを防ぐことが目的です。葉たばこは直播きせず、苗床である程度育ててから間作場所に定植します。

	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
麦類	麦踏み③	麦踏み④	出穂	登熟	刈り取りはせ掛け	脱穀		土づくり	種まき麦踏み①	麦踏み②
葉たばこ or 豆類		種まき		定植	土寄せ	心止め収穫		残幹処理(耕起)		
				種まき	土寄せ			収穫		



～昭和50年頃まで！生活を支えた大麦

『磐清水村史』によると、昭和30年の作付け面積は大麦が701反、小麦が410反であるのに対し、米は121反。山間部など、水稻栽培の圃場整備が遅れた地域においては、栽培しやすい麦類を可能な限り作付けしていたと推測。

また、麦類を多く栽培していた当時は、水車や石臼を使って、自力で製粉していた家も多いようですが、集落規模で製粉屋があったという話(千厩、大東のヒアリング結果より)や、製麺屋が製粉と製麺をしていたという事例も。

ちなみに、製粉をお願いする際には、現金で支払うのではなく、原材料を提供する(収穫した麦類を持ち込み、そのうちの何割かを製粉屋に納め、その対価に見合った量を製粉してもらう)というパターンが主流だったようです。

同様に、麦類と魚や肉などを、物々交換することもあったと言い、「食糧」としてだけでなく、お金のような役割も担っていたようです。

大麦はイネ科の植物で、大きく「二条種」「六条種」に分けられます。その中で、「はだか麦(子実の外皮が剥がれやすく、粒が裸になる種)」「もち麦(もち性遺伝子型を有する品種)」など、品種が複数存在します。麦作に熱心だった千厩町磐清水・濁沼の藤野芳右衛門という人物は「東山一号」という大麦の新品種を創り出したという記録も。

なお、「押し麦」は外皮を剥いた大麦を蒸してから平たく加工(圧ぺん)したものであり、一般的にはうるち性の品種が使われているようです。